

# 感染症発生動向調査委員会報告 10月

## 今月のトピックス

市内のインフルエンザの流行が第43週に警報レベルとなりました。  
新型インフルエンザで市内初めてオセルタミビル耐性が確認されました。  
急性C型肝炎の報告がありました。現在感染源について調査中です。

### 平成21年 週 - 月日対照表

第39週	9月21～27日
第40週	9月28～10月4日
第41週	10月5～11日
第42週	10月12～18日
第43週	10月19～25日

#### 【患者定点からの情報】

市内の患者定点は、小児科定点:88か所、内科定点:57か所、眼科定点:18か所、性感染症定点:26か所、基幹(病院)定点:3か所の計192か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の13感染症を報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計145定点から報告されます。

平成21年9月21日から平成21年10月25日まで(平成21年第39週から第43週まで。ただし、性感染症については平成21年9月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

#### 全数把握の対象

##### < 細菌性赤痢 >

チュニジアからの帰国者に見られました。旅行地における感染予防の知識の普及が必要です。海外旅行者のための感染症情報をご活用下さい。

[http://www.forth.go.jp/tourist/worldinfo/04\\_africa/h09\\_tuni.html](http://www.forth.go.jp/tourist/worldinfo/04_africa/h09_tuni.html)

##### < 腸管出血性大腸菌感染症 >

10月の報告数は、28日現在では4例ですが、9月の委員会後の報告と併せると8例です。9月報告の2歳の女兒にHUSが見られました。近隣の複数自治体では、同一の内臓肉チェーン店からの発生もあり、通常ならば報告数の減っていく時期ですが、今後の発生に注意が必要です。飲食店における腸管出血性大腸菌O157の食中毒対策について

<http://www.mhlw.go.jp/topics/syokuchu/kanren/kanshi/dl/090915-1.pdf> をご参考下さい。

##### < レジオネラ症 >

10月の報告数は、28日現在で2例です。レジオネラ症についてはこちらをご参考下さい。

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/legionellosis1.html>

##### < 急性肝炎(C型) >

1例みられました。輸血後の発病であり、現在輸血によるものか調査中です。急性ウイルス性肝炎につきましては、感染症法に基づき全数保健所への届出が必要です。また、血液由来製剤投与後に急性ウイルス性肝炎を認めた場合は、薬事法に基づき製造販売業者等への情報提供が必要になります。

詳しくは

厚生労働省輸血療法の実施に関する指針

<http://www.hourei.mhlw.go.jp/hourei/doc/tsuchi/2004I2102200021.pdf>

血液製剤等に係る遡及調査ガイドライン

<http://www.mhlw.go.jp/new-info/kobetu/iyaku/kenketsugo/dl/5anzen4a.pdf> をご参考下さい。

### <梅毒>

10月の報告数は2例ですが、うち1例は晩期顕症梅毒でした。梅毒は予防と治療が双方共可能な疾病です。感染予防と、後遺症を残さない時期での早期発見のため、今後の啓発が重要と思われます。

梅毒についてはこちらをご参考下さい。

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/disease/syphilis1.html>

### <HIV 感染>

10月の報告数は2例で、うち1例はAIDSの状態でした。また、1例は同性間の性的接触によるものでした。HIV感染症に関して治癒に到る治療法が無い現状の中で、日本人男性の同性間での性的接触による感染は増加しており、今後感染予防と早期発見の更なる対策が必要です。

平成20年の現状についてはこちらをご参考下さい。 <http://idsc.nih.go.jp/iasr/30/355/tpc355-j.html>

### <破傷風>

1例の報告がありました。46歳の男性です。微細な外傷によるものと思われます。全国でも、破傷風の防御抗体レベルの下限0.01IU/ml未満は40歳以上に多く、患者も多くが40歳以上で見られています。尚DPTは1968年から行われていますが、1970年代の百日咳ワクチン禍による接種率の一時的な低下の時期があったことにも注意が必要と思われます。

平成20年末現在の情報をご参考下さい。 <http://idsc.nih.go.jp/iasr/30/349/tpc349-j.html>

### <急性脳炎>

10月の報告数は2例です。4歳と10歳に見られ、インフルエンザによるものでした。先月までに発生のあった2例は6歳と11歳であり、季節性インフルエンザに比べると比較的年長児に見られています。

インフルエンザ脳症について平成15年11月より全数届出となっています。季節性インフルエンザによる脳症の状況につきましては、こちらをご参考下さい。

<http://idsc.nih.go.jp/iasr/26/309/dj3093.html>

<http://idsc.nih.go.jp/iasr/23/274/dj2742.html>

## 定点把握の対象

### <インフルエンザ>

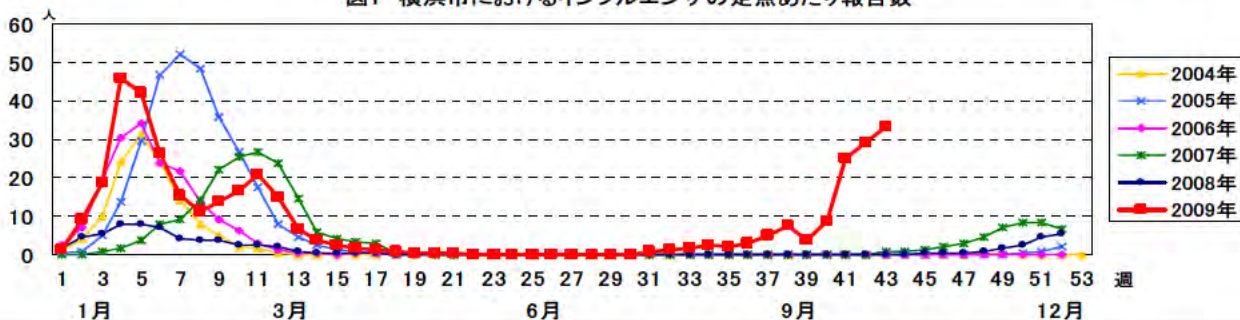
第41週には流行の注意報レベルである「10」を超えましたが、第43週には定点あたり33.33と、警報のレベル「30」を超えています。例年にない早い時期での警報です。行政区別では、瀬谷区68.29、泉区54.14、都筑区52.80、緑区47.40、その他港南区、磯子区、港北区、青葉区、旭区、戸塚区の計10区が定点あたりの報告数30を超えており、注意報レベルである「10」を超えていないのは、中区の8.71のみです。全国では24.62、神奈川県(横浜、川崎を除く 以下県域)では26.29、川崎市では27.15、東京都では25.24と何れも横浜より低い数値です。

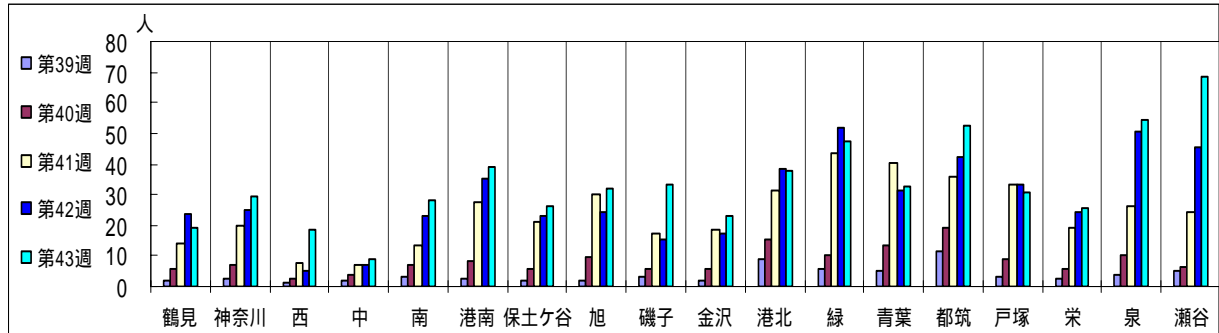
また病原体検出状況では、7月以降すべて新型インフルエンザAH1pdmが確認され、季節性インフルエンザは確認されていません。第36週(8月31日からの週)から第40週(9月28日からの週)までのインフルエンザ(疑い含む)とされた30検体について、23検体にAH1pdmが検出(うち1検体はhMPV(PCR)も検出)され、1検体はhMPV(PCR)のみが検出されています。残り6検体については現在培養中です。今のところ季節性インフルエンザについては検出されていません。

オセルタミビル耐性を示唆する遺伝子変異(H275Y)が1例確認されました。オセルタミビルに感受性を持つ季節性インフルエンザH1N1に比べると、310倍くらい感受性が低下していました(IC50 31.1nM)。ザナミビルへの感受性は保持していました。

また今までに解析した29株すべてに、アマンタジン耐性を示唆する遺伝子変異(S31N)が見られています。

図1 横浜市におけるインフルエンザの定点あたり報告数





< 感染性胃腸炎 >

定点あたりの報告は1.56と低値の状態ですが、すでに、市内の学校でノロウイルスによる集団感染が確認されており、今後の流行に注意が必要です。全国では2.37、神奈川県県域では2.39、川崎市では2.55、東京都では2.19と何れも横浜より高い数値です。

< 性感染症 >

性感染症は、診療科でみると産婦人科系の11定点、および泌尿器科・皮膚科系の15定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。

9月は、性器クラミジア感染症は男性11例、女性16例、性器ヘルペスウイルス感染症は男性3例、女性7例。尖圭コンジローマは男性6例、女性3例、淋菌感染症は男性11例、女性1例が報告されています。

【病原体定点からの情報】

市内の病原体定点は、小児科定点：8か所、インフルエンザ(内科)定点：5か所、眼科定点：1か所、基幹(病院)定点：3か所の計17か所を設定しています。

検体採取は、小児科定点8か所を2グループに分け、4か所ごと毎週実施し、インフルエンザ定点は特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。眼科と基幹定点は、対象疾患の患者から検体採取ができた時に随時実施しています。

衛生研究所から

< ウイルス検査 >

2009年10月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点38件(鼻咽頭ぬぐい液)、内科定点13件(鼻咽頭ぬぐい液)でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点はインフルエンザ(疑いを含む)28人、咽頭炎・気道炎7人、RSV感染症、耳下腺炎、発疹症各1人、内科定点はインフルエンザ12人、気道炎1人でした。

11月10日現在、インフルエンザ患者(小児科定点26人、内科定点12人)と気道炎患者(小児科定点2人、内科定点1人)合わせて41人から、新型インフルエンザウイルス(AH1pdm)が分離されています。これ以外にPCR検査では、小児科定点のRSV感染症患者1人からRSウイルス、気道炎患者1人からコクサーキーウイルスA6型ウイルスの遺伝子が検出されています。また、小児科定点のAH1pdmが分離されたインフルエンザ患者1人からはヒトメタニューモウイルスの遺伝子も検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

< 細菌検査 >

10月の感染性胃腸炎関係の大腸菌株の受付は11株で毒素原性大腸菌が1件検出されました。

溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体受付は4件でA群溶血性レンサ球菌が2件から検出されました。